筆者の言葉

「君は『最後の晩餐』を知っているか」に寄せて

布施　英利

これは、絵画について書いた文章です。

しばしば、画家は、自分の絵について「それが言葉で説明できないものだから、絵で描いた」という言い方をします。画家にとっては、それは本音でしょうし、言葉ではなく絵で表現できるから、彼らは「画家」なのです。

私は、そんなふうにして、この世界に生まれた絵画と言うものを、言葉で伝える仕事をしています。それは「言葉」というものの可能性への挑戦であり、また、そもそもそれが、言葉あるいは文章と言うものの本質だと考えます。人は、言葉で描けないものを、言葉で表現しようと、これまでの歴史のなかで格闘してきました。そもそも「言葉で描けないもの」というのは、何も絵画などの芸術に限ったことではありません。人の心や、社会の動きや、自然の光景や、世界のあらゆるものは、そう簡単には言葉では描けません。それを言葉や文章でとらえようというのが、文学であり、学問であったわけです。

ここではレオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』について書きました。ふつう、美術作品へのアプローチの方法や語り口には、その作品の背後にある歴史的な出来事や、社会背景、あるいは伝記的な画家像から迫る、というやり方が一般的です。美術史という学問などがそうです。しかし歴史や社会や人物をいくら語っても、その核心にある「絵画そのもの」にはなかなか迫ることはできません。甲斐がそのものまわりを、ぐるぐるまわっているだけ、ということもあります。

私は、言葉を連ねた文章によって、その芸術作品の本質をとらえたい、と常々願っており、その方法と文体を模索しています。専門用語を並べるのは、専門家にとっては簡単なことですが、それで読者に何かを伝えるのは難しいことです。私は「中学生レベルの国語力」で、つまり語彙力や言い回しの仕方で、しかし中学生には決して語ることのできない、「深い」話を文章にしたいと志しています。そんな私にとって、私の文章が中学の国語の教科書に載ることは（美術の教科書ではなくて）、とても嬉しいことでした。

しかし、取り組む相手は、天才レオナルド・ダ・ヴィンチの傑作『最後の晩餐』です。そこにあるのは、私など足元にも及ばないような、高い峰です。しかしだからこそ、文章を書く醍醐味というものもあります。美術についての文章を書く人間は、しばしば画家や彫刻から「自分は絵も描かないで、他人の褌（ふんどし）で相撲を取っているような奴だ」と批判もされます。しかし、どうせそれが他人の褌なら、何よりも高く深い褌と取り組むべきです。私は、芸術のど真ん中のもっとも高い峰である、レオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』に挑みました。

これは私の挑戦ですが、また、私の文章を読む中学生にも、同じように『最後の晩餐』という褌と格闘を演じてもらいたいと思います。

この教科書では、『最後の晩餐』の図版を見ながら、文章が読めるようになっています。文章の論理や説明を理解するだけでなく、図版を見ながら「目」でも理解をしてもらいたいと思います。

ほんとうの芸術というのは、すぐに分かるものではありません。しかし「だから自分には関係ない」と思わずに、「分からないけれども、何かスゴイものだ」、そう思ってもらうことが、何より大切です。私の文章は、そして現場の国語の先生の役割は、子どもたちを「ほんとうの芸術へと導くガイドとなることなのでしょう。美術を鑑賞するいちばんよいやり方や、本物の作品を肉眼で見ることです。しかしイタリアのミラノにある『最後の晩餐』は、中学生が誰でも見られるものではありません。だからこそ、この文章を読んで「いつか、大人になったら、見てみたい」、そう思ってもらいたいと、願っています。